

2011/09/10

第六回日中戦争史研究会 於：愛知大学車道校舎

参加者（五十音順、敬称略）：

王敬翔（愛知大学）、菊池一隆（愛知学院大学）、佐藤敦信（愛知大学）、柴田哲雄（愛知学院大学）、千賀新三郎、野口武（愛知大学・院生）、馬場毅（愛知大学）、広中一成（愛知大学・院生）、丸田孝志（広島大学）、森久男（愛知大学）、安井裕、楊韜（名古屋大学）

記録作成：小嶋祐輔（ICCS 研究員）

### 報告1：楊韜（名古屋大学）

#### 馬占山の抗日活動に対する支援について ——生活週刊社の募金活動を中心に——

【報告要旨】これまで馬占山に関しては、「江橋抗戦」を中心に彼の抗日活動について広く語られてきた。しかし、満州事変勃発後、当時の国民政府が不抵抗の方針を打ち出す中、彼らが如何にして抗戦活動に必要な資金を調達したのか、如何にして抗戦を継続したのかについては、必ずしも明らかではなかった。本発表では、当時の中国全土からの支援というマクロな視点を押さえつつ、生活週刊社の募金活動というミクロの事象を取り上げ、その実態を解明する。

（発表内容についてはレジュメ参照）

【質疑応答】（司会：馬場）

馬場：特にまとめることはしないので、質問があればどうぞ。

丸田：票力について。受け取り側に対して、控えのために出したのでは。銀行側が馬占山に対して。質問だが、募金活動は生活書店以外でもやられていたということで、ナショナリズムに関する、抗日運動を盛り上げるための募金活動の歴史的な位置付け、経緯について伺いたい。また、地方政府機関も募金活動に加わっているとあったが、これについてどう考えるか。国民政府にとっては、日本の統治が攪乱されて落ち着かないほうがいいのかも。黙認するのか、裏から奨励しているのか。国民政府は実際のところこの募金活動をどうみていたのか。

楊：もちろん、生活書店が初めてではなく、例えば上海の企業なども行ったが、メディア企業を通して送られたものではない。これまで生活週刊社の抗日活動の研究は言説研究が中心だった。言説が世論をつくるのは重要だが、生活週刊社のメディアとしての特徴は、自ら募金を呼びかけたということ。そのためにこの事例を検討した。他のメディアを見ると、一部読者からの献金もあるが、生活週刊社のような組織的な、自ら手がけたもの

はない。全体のナショナリズムの中の一部。ミクロな事象を取り上げて、大きな事象をみたい。地方政府の話しだが、どうして湖南省の政府だけ献金があったのかは、今のところわからない。

**丸田**：生活週刊社の募金活動というのが、中国近代においてはじめて大々的に一般大衆を含めて行われたものであり、ナショナリズムという点においても非常に画期的なものであったと考えるということか。

**楊**：今回の発表で取り上げた生活週刊社の募金活動の前年、1931年の夏に揚子江の大水害があった。その際も、生活週刊社は募金活動を行っている。それが終わる前にこの馬占山の事件が起こった。水害支援と違って、これは政治的な特別なケースだが、国民政府の支援がないからという点で、全体をつなげて考えていきたい。狙いが分かり難かったかもしれない。

**丸田**：前史ということでいうと、他のメディア・新聞とかがナショナリズムと関係ないところで救済活動、募金活動を結構やっていたとか、中国のメディアだけじゃなくてヨーロッパのとか。そういった前史があって、そういったものがだんだんナショナリズムに使われていくようになるという流れがあるとか。そうした理解ができるかどうかとも検討して欲しい。

**楊**：他の国の前例があって、同じような形をとったという・・・

**丸田**：例えば、キリスト教の教会とかも十分考えられる。

**楊**：ありがとうございます。考えてみたい。

**菊池**：鄒韜奮と蔣介石は仲が悪かった。蔣介石のやり方にことごとく反対したという。鄒韜奮自身がアメリカ帰りの切れ味のあるジャーナリストという位置付けだった。そして生活週刊社は圧倒的に金がなかったにもかかわらず増えていく。それはなぜかという、株式会社ではなくて、合作社形式であったから。株を募集しながらやっていく、それを民主化という形でやっていきながら、同時に満州利権にかかわる民族資本家を味方につけて、日本の満州侵略に対する利権の確保というかたちでマスコミを動かしていった。こうした点を考えると、メディアのなかの位置づけも重要だが、生活週刊社の多面的活動のなかにこの活動がどう位置づけられるのかということを押さえ、満州事変時期の鄒韜奮、生活週刊社を理解しなければならない。

献金の歴史的意義についてだが、割合と特色を導き出さないといけない。それから生活週刊社と生活書店の相互関係がよく分からない。それは説明できるのか。それから無抵抗と不抵抗とは違うという、安井さんの指摘がある。私は不抵抗で統一しているが、不抵抗と無抵抗についてどう考えているのか。馬占山が満州国の軍事委員会になったという問題だが、あれは変節というよりもならざるを得なかったと私は感じている。それと「粵東女子」についてもっと分析しないと分からない。9ページの表にある企業の分析をしなくてよいのか。「粵東女子」も気になるが、これらの企業がどういう企業で、どうして支援したのか。その狙いや抗日、満州、もしくは上海との関係を分析しなければならない。献金者の

うちの学校と民間団体は何となく理解できるが、うえの二つ企業と地方政府、さきほど湖南政府がなぜ支持したのかという話があったが、鄒韜奮は湖南省と深い関係があるのでは。

楊：ないと思いますが・・・。

菊池：当時の湖南省の主席は？

楊：すみませんちょっと今は分からない。

菊池：調べれば関係が分かるかもしれない。もっと特色ある分析をして欲しい。

楊：なぜ生活週刊社の募金と送金が、会社組織としてできたのか。もともと生活週刊社は書報代弁部というのがあり、そこは読者からの要望などが集まったため、経営のノウハウはあり、募金活動に役に立ったのではと思うが、まだ実証できる段階ではない。だから今回は、合作社という形式で募金活動がスムーズに行えたとは言えなかったが、そういう可能性があったとは考えている。

鄒韜奮が海外にいた間は、杜重遠が経営を任されていた。杜重遠は東北出身で、生活書店のなかで東北関係企業とのつながりがあった。不抵抗と無抵抗についてですが、基本的に私は不抵抗としているが、日本では無抵抗という記述がある。私が教育を受けた中国では不抵抗なので、不抵抗を使いたい。統一するよう注意したい。

馬占山の変節の真実というのは、やはりよく分からない。今回あまり触れられなかった。企業の献金は重要だが、今回はあまり整理していない。馬占山を利用してビジネスを向上させるような意図はどこかにあると思うが。例えばタバコの広告には、馬占山の肖像を使って宣伝したものがある。募金の金額については、毎回の報告からみると、一つの特別な企業の献金が多かったとも言えない。『生活』という雑誌に載せたら会社名が目されるということではないか。湖南省との関係は今ちょっと分からない。

菊池：馬占山は関東軍につかまったのでは？その時に関東軍に説得されて・・・。

楊：それに関する記述が様々で・・・。

菊池：投降したというが、実際には投降していなくて、先鋒を任された時に矛先を変えて再び関東軍を攻めるという・・・。

楊：彼は1950年に北京で亡くなったのですが、その前にそれについて自ら語らなかった。なぞのまま亡くなった。

菊池：当時の献金総額のなかでの生活週刊社の献金の位置づけも必要だ。山のような献金があって、そのなかのパーセンテージはどれくらいなのか。

楊：まだそこまでできていない。機関や規模、少なくともメディア企業のなかでの割合は調べて出していけるかと思う。

森：この研究の意義は、馬占山研究の一部なのか、生活週刊社研究なのか。

楊：私のなかでは生活週刊社。世論のつくりてとしての言論活動だけでなく、今で言うメディア企業の活動をした。その一つとしての抗日運動支援の募金活動。馬占山とは関係はもちろんあるが。

森：生活週刊社の募金活動の研究としては、これは類推だが、綏遠事件援綏運動時にも

色々な募金活動があった。この生活週刊社もかなり大々的にやっているのではないか。

**楊**：毎回ちゃんと報告があって、調べられるほどのものはないと思う。揚子江の水害と馬占山の時が中心ではないかと思う。

**森**：私の大雑把な見通しでは、綏遠事件の時の援綏運動の募金活動の研究の方がテーマとして意味があるように思う。

**楊**：できたら両方やっていきたい。もし生活書店の募金活動全般を見ていくのなら、これだけではなく多角的にやるべきだと思う。

**森**：生活週刊社以外にも、南京国民政府時代にたくさんの他の新聞雑誌が出ていた。他紙との比較は考えていないのか。

**楊**：あまりにも数が多いので、とりあえず四大新聞からはじめています。

**広中**：12 万元という額があるが、馬占山というのは黒竜江の偉い人で、800 万元も使い込んでいたということもあるから、12 万元というのは馬占山が戦うのに大した金額ではないのではないかと思ってしまう。生活週刊社は金銭の支援が目的なのか、抗日の機運を盛り上げるのが目的なのか。自分たちはこの 12 万元というのをどう総括しているのか。自分たちの活動がメディアとして成功したのか、失敗したのか、どう総括したのか。それから献金者を見ると、上海から広東あたりとなっていて、そのあたりでこのメディアの活動、抗日の機運が盛り上がっていったと思うが、その盛り上がりについても生活週刊社は自分たちでどう総括していたのか。

**楊**：いかに自身の発行部数を増やすのかというのが鄒韜奮のやり方だと思う。『生活』のなかで都会の生活を載せたり、海外の見聞録を載せたりして読者数を増やす、或いは読者の投書欄を使って読者数を増やすということがあった。馬占山の募金活動もその一環であったと思う。発行部数を増やすためのものだと思うが、このケースだとナショナリズムがかかわっているので、鄒韜奮自ら雑誌を大きくするためとか、そんなことを言わないと思う。それはあくまで推測。立証することはできない。「盛り上げた」と私が言うのは、12 万元という金額ではなく、より多くの人に参加させて、影響力を発揮したこと。金額は少ないが、影響力はあった。800 万元というのは、日本側についた後のことで、それまではゲリラ戦。その時の馬占山にとって 12 万元は大きい。

島田先生の本のなかに書かれた 98 万元のなかの 12 万元だとしたら、1 割以上になる。彼が日本側につく前の状況は、色々な本で大変厳しかったと言われている。

**広中**：では自分たちでも成功したと思っていると見なしてよいのか。

**楊**：後に報告を出すくらいだから、円満に終わったということでは。生活週刊社もそう考えているのでは。

**丸田**：もっとも多いのは一般企業からのものだが、具体的な数字、献金者が何省、何市、職業、年齢などが分かればよい。そこから影響の広がりがわかるかもしれない。そういう情報があるのか、ないのか。

**楊**：最初の段階は具体的に載せていた。後半はあまりに増えて載せるのをやめ、個別に

郵送していた。その郵送したものが分からない。示すとしても途中までの結果しかできない。

**丸田**：個人献金は何万口であったとか、そういう報告はないのか。

**楊**：報告書のなかにはない。

**丸田**：メディアとしての影響力をのばして、発行部数がどれくらい変わったのか。

**楊**：37年以降飛躍的に15万くらいまで増やすが、この段階ではまだ大きな変化はない。

**柴田**：比較の要素も入れたほうが良いのではないか。比較を入れないと、特徴は見えないのかなと思う。日本の研究は細かいところに特長があるが、アメリカに一年いてそう思った。例えば、日清戦争でも日露戦争でも良いが、日本でも朝日、毎日、読売新聞とかが同じようなことをやっていると思う。多くの国民が募金していると思う。そういうものと比較してみて中国のナショナリズム、この時代の特徴を捉える視点が必要かと思う。或いは毛沢東時代の抗美援朝などと比較してみると良い。

**楊**：長いスパンで比較してみたいが、今は難しい。私も日本では小さいテーマでやる。まずは他のメディアとの比較をやってみたい。

**馬場**：では、もう質問がないようでしたら、楊さんのご報告は以上です。

## 報告2：馬場毅（愛知大学）

### 山東省の傀儡軍について

【報告要旨】中国史研究者の間でも、これまで、日本軍に協力した傀儡軍の研究は忘れられた分野であった。それには革命史に収斂する問題関心のあり方の影響があったわけであるが、この時期の日本軍やそれに協力した傀儡軍など、革命や抗日に反対した勢力の多様な動きを再構成し、それとの対抗のうえで、再度抗日勢力を位置付け、中国現代史を再構成する必要がある。本報告では先行研究を踏まえながら、日本軍の傀儡軍育成の方針、山東省における傀儡軍の実態とその発生の要因について考察する。

（発表内容についてはレジュメ参照）

### 【質疑応答】（司会：森）

**森**：過去の日中戦争史研究において、傀儡軍研究は空白であったが、近年傀儡政権への関心とともに次第に研究が増えてきている。馬場先生は傀儡軍が生まれ消滅する過程の概観を報告した。質問、意見のある方はどうぞ。

**馬場**：呉化文のその後について補足を。国民党に戻って、国共内戦の時には人民解放軍に入る。呉化文の義拳といわれる。最後は浙江の建設庁長になる。もともと韓復榘のもとに

いて、それから汪精衛国民政府に所属して、所属をする時に軍統の戴笠と話をつけている。この時期の軍だけでなく、汪精衛国民政府の要人のなかにも軍統を通じて蒋介石の国民政府と内々の関係を保っているものが非常に多かった。呉化文自体は、日本が戦争に負けると国民党軍になって、その後人民解放軍に参加して、その後はずっと大陸には残る。先ほど報告の中で述べた呉化文工作をした松岡治さんという方に、呉化文が和平陣営に参加した理由には戴笠と内々に話をつけていたことがあるというのが最近の研究で分かったと話したところ、大変がっかりされていた。自分としては、命がけで呉化文の司令部に乗り込んでいって工作をして、和平工作をしたにもかかわらず、結果的にその裏で戴笠とつながって、蒋介石と内々に話をつけておいたというのを聞いてがっかりした、と。今日は山東省との関係で話をしたが、実は汪精衛国民政府に参加した軍隊のなかにも何人か戴笠との関係を意識して参加したものが結構いる。非常に複雑だ。

**柴田**：質問ですが。大戦末期、日本はソ連を介した連合国との和解を模索していた。当時ソ連は中立国だったので、ソ連を介して和平を模索する。その関係で、中国共産党と日本軍が手を結ぶ動きがあったそうだ。先生も引用された防衛庁防衛研修所戦史室編纂の『北支の治安戦』に載っていたと思う。実際に沈鴻烈も戦後の所謂漢奸裁判で、当時日本軍は新四軍や八路軍と手を結ぼうとしていて、自分はそれを阻止するために傀儡軍の配置転換をして中共軍と戦っていたという。その辺が調べてもよく分からない。先生のご発表を聞いていると、日本軍はあくまでも八路軍や新四軍と戦っていたという一色なのだが、裏で手を結ぶ動機などというのはどう位置付けたら良いか。

**馬場**：共産党と汪精衛政権との関係になると思うが、『王明回想録』のなかに、毛沢東が潘漢年を派遣して汪精衛政権と話をつけようとしたという記述がある。八路軍は汪精衛政権に対しては基本的に傀儡軍として戦ったことになっているのだが、話をつけようとした形跡もある。後に潘漢年が 50 年代に粛清されたのは、彼がその秘密を知っているからだという。これについてある研究会の席上中国の先生に聞いたところ、それを真っ向から否定しないでこう言っていた。あそこは大変重要な地域だ、共産党にとっても重要な地域だ。だからそういうことはあり得ると言っていた(ただし 2004 年、ハワイで行われた「日中戦争の軍事史に関する国際的会議」で討論の中でこの話を私が述べると、中国の楊天石先生は潘漢年の失脚について別の原因を述べた)。共産党中央は汪精衛政権に対して、表向きは漢奸だからこれと手を組むとは言わないが、秘密工作としてのある種のお互いの紳士協定というようなことを考えていたというのにはあり得るのではないか。

**柴田**：李士群の部下で共産党の、日本に留学経験のある人がいた。

**馬場**：意外と、共産党の言う反漢奸とか、ああいうかたちだけではない共産党と汪精衛政権の関係、汪精衛政権と蒋介石の関係があり、特に汪精衛政権末期になると蒋介石と話をつけようとする。ただ戴笠が早く死んだので、仲立ちをする人物がいなくなった。

**柴田**：アメリカのベトナム戦争、イラク戦争、アフガン戦争の占領地政府と比較したいと思っているのだが、相対的に日本軍の傀儡政府育成は、アメリカのベトナム戦争、イラク

戦争、アフガン戦争と比較すると遥かに成功しているのかと思う。というのも圧倒的な数が寝返っている。アメリカ軍のほうが当時の日本軍より巨大だし、資金も物資も豊富だが、なぜあれだけ手を焼いているのか。しかも占領している人口も違う。やはり日本が成功していた言えるのではないか。日本の工作は相対的に成功していたと思う。

**馬場**：共産党が山東で、三角闘争というのをしていた。三角というのは八路軍と日本軍と国民党を指している。八路軍から言うと日本軍も敵だし、国民党も敵だ。国民党は日本軍と八路軍と両方からやられる。山東の国民党軍は所謂雑牌軍だ。そのため八路軍の攻勢に対抗できなかった。そこで日本軍の攻撃を避けるために、汪精衛政権につくという判断をしたと思う。今仰った大きな問題に答えるのは非常に難しいが、協力した傀儡軍というのは大きな戦闘力はなかった。がんばったのは呉化文ぐらい。あとは地域の警備隊。基本的には八路軍と日本軍のサンドウィッチになって、せめて日本軍側の攻勢を避けるためという自己保存だと思う。

**柴田**：私はイデオロギーをどう扱うかだと思っている。アメリカの戦争を見ていると、イデオロギーを前面に出しており、帰順する余地がない。例えば今であれば、キリスト教とイスラム教の戦争というかたちになってしまっている。ベトナム戦争の頃も、共産政権は潰せというかたちで、冷戦のなかでイデオロギーがあった。日本も当時反共イデオロギーを掲げていたが、日本は柔軟に中国のナショナリズムを上手く操作してきたのかもしれない。或いはイデオロギー戦争みたいに白か、黒かにしないで、灰色の部分を残して、帰順を受けいれるような柔軟性があったのでは。

**馬場**：日本軍の場合、汪精衛政権側に国民党軍を勝ち取る場合、大東亜の解放とかそういうことは一切言っていない。イデオロギーという踏み絵を踏ませる必要はない。汪精衛政権と国民党政権においては、反共という点では一致する。汪精衛のところに入っていれば、とりあえず日本には攻撃されない。ただし、特に国民党がまだ残っているうちは対国民党戦にあまり動員されたくない。つまりこういうサンドウィッチのなかで自己保存をした。そのときに大義名分として「曲線救国」と言った。アメリカと比べると状況が違うと思う。

**菊池**：山東省の位置付けが気になる。それと秘密結社という得意分野が出てこない。それからデヴィット・ポールソンとの関係も。まず、臨時政府は北京と改名したが、国民政府は改名していないので、北平のまま。その辺を歴史的やる場合にどう考えるのかという疑問がある。

私は人数分けよりは、装備や秘密結社が気になる。あとは機構における改編とか、そういった部分が気にかかる。また、日本軍との関係における変遷と時期区分、抗日戦争開始から、1941年の新四軍の皖南事変で第一期を切るが、武漢陥落で切らなくていいのか。山東省の問題として切っていいのか。更には山東省の枠内だけで果たして切れるのか。山西省とか。劉桂棠あたりは、あらゆるところに出てくる。山東省のみを見ていて山東省が解明できるのか。そこにおける傀儡政権相互の影響力を感じている。あとは「京古鉄道」の表記。さんずいの「滬」ではないか。

一番の問題は『北支の治安戦』。その穴埋めとしての『山東解放区大事記』。これは良いのか。これはあちらで端折って書かれたものだから、連発して使うのは問題だ。『中国人解放軍軍戦史』は使われるかなとは思いますが。最後の方の論理は非常に面白い。途中の中共、国民党、傀儡軍の相互作用で、そして国民党が消えて中共の八路軍が出てくるというのは良く分かるが、私の研究では傀儡軍は諸刃の剣だ。

**森**：資料の問題は難しい。劉桂棠の動向とか。

**馬場**：「京古鉄道」については、ありがとうございます。装備については、詳しい装備については日本軍が記録していない。時期区分については傀儡軍育成に関しての日本側の方針による時期区分だ。皖南事変とは直接の関係はない。それから紅槍会のような秘密結社はどうなっているのかということだが、これはもっと地元の農村地区の基盤になってくる。だいたい日本側はそこまで見ていない。つまり県の警備隊であって、県の下の農村部の武装組織、これをどうするかと言う問題は、共産党或いは国民党側が非常に注目していたが。ただ、日本軍は一部だが紅槍会などをいわば農村部の武装自衛隊のような形にしようとしているが、どうも政府組織のレベルではあまり注目していない。各地に行った特務組織の連中はある程度それらを活用している、ただし政策としては注目していない。史料の問題についてだが、私も何回か防衛庁の戦史室に行ったが、今のところ『北支の治安戦』以上の質の良い資料を見つけられていない。最近「アジ歴」に検索をかけているが、今のところ論点を変えるようなものは出ていない。それから『山東解放区大事記』、これは共産党側がつくったものだが、国民党側の『山東文献』という大陸から台湾に行った山東省出身者の同窓会誌がある。そこはかなり日中戦争中の回想録が載っている。その中心は張玉法先生。張玉法さんからバックナンバーを全部いただいた。それとの対照も必要かもしれない。

**菊池**：外務省関係もあると思う。やはり『大事記』はバイアスがかかっている。あとは新聞資料が結構あると思う。

**馬場**：資料についてどこまで広げるかという問題がある。どこかで線を引かないといけない。

**広中**：私も傀儡軍に関心があって調べているが、山東省傀儡の位置づけについては、河北省などとの比較が必要だと思う。河北や北京は重要地域なので、なぜ河北ではなく山東省に傀儡が一番多かったのか。冒頭に、近代史のパラダイム転換も考えて抗日に反対した勢力の再構成をするとあるが、本当に再構成するのであれば、その名前自体も再構成しなければならないのではないのか。再構成しようというのに傀儡と名付けていると、再構成にならないのではないのか。例えば友軍とするとか、治安軍という名前があるなら治安軍とすればよいのに、そこに傀儡軍という今までの名をつけているのはどうなのか。1ページで、治安軍というのが出てきて中国側が華北綏靖軍となっているが、私の調べたところ元々治安軍という名前であって、臨時政府が政務委員会に変わる時に名称も綏靖軍に変わった。だから、中国側の名前が綏靖軍ということではなくて、名前自体が治安軍から綏靖軍に1941年に変ったと認識している。それから「京古鉄道」だが、冀東政府がまだある時に、通



州と古北口に鉄道をつなげる計画をたてた。だから通古鉄道というのができていた。それが北京に伸びて京古鉄道になったのかと思う。その文章の後ろに沿線の四県とあるので、通州、北京、古北口のあたりでたぶん四県くらいある。それで、「京古」の「古」の字が違うのではないと思う。呉化文が戴笠と話をつけて汪精衛の方に入ったとあるが、帰順したあと例外的に呉化文の傀儡軍は日本軍と協力して国民党への攻撃を行ったとある。ということは、戴笠に密命を受けて日本軍に入り、元々所属していた国民党軍を攻撃したということになる。国民党とわざと戦って、ばれないようにしろという密命があったのかどうかよく分からない。更に厲文礼を捕まえて和平軍に入れたとあるが、厲文礼は国民党軍なので、呉化文が日本軍に寝返って国民党と戦って、厲文礼を捕まえて日本軍に入れたということは、どんどん国民党の人たちが入ってくるという流れになる。こういう流れを呉化文が密命を受けてやっていたのか。あと、警防隊というのは通州事件があって、その残存した保安隊を再建された冀東政府が、名前が保安隊ではダメだからという理由で警防隊に変えた。

**馬場**：治安軍と綏靖軍についてだが、中国側が華北綏靖軍としたというのは『北支の治安戦』の記述に出てくる。注の8にあるように、正式には1940年に。詳細な背景は分からないが、名前が変わったということはあると思う。それから、なぜ山東省で傀儡軍が多いのかということだが、ひとつは山東省にいたのが国民政府の直系軍ではなく、雑牌軍であったということ。中央軍と違って補給もままならないので、長く戦い続けるとだんだん弱ってしまう。八路軍と日本軍の間で、どうにか生きていかなければならないという状況だった。それから省政府の実質的機能が、41年に沈鴻烈がいなくなってから、なくなってしまふ。43年に于学忠の部隊がいなくなると、正規軍も山東省政府の名義もなくなってしまふ。こういう状況が他の省にはない。結局そういうなかで、一方で共産党の抗日根拠地がどんどん拡大してくる、補給はままならないとなると、自己保存せざるを得ない。傀儡軍と国民党軍の数が逆転してしまうということがあった。こういうことは山東にしかない。

それからパラダイム転換のためには傀儡軍という名前も考え直すべきではないかという意見だが、やはり日本軍の動き、武器と命令があって、その下に組み込まれている軍ということで傀儡軍を使いたい。現象的には協力軍といっても良いとは思いますが、独自の戦略で動いていたわけではない。私は傀儡軍と呼びたい。八路軍と違い独自に動いているわけではなかった。呉化文がなぜ国民党軍を攻撃したのかはよく分からない。あえて仮説を述べれば、山東省は沈鴻烈の系統の地方軍。呉化文もこの系統だ。于学忠は正規軍の東北軍であって、これは野戦軍。共産党側は反共頑固派の沈鴻烈と于学忠を抗日民族統一戦線対象として分断する。どうも沈鴻烈の系統と于学忠の系統の間が上手くいっていなかった。そもそも韓復榘が黄河で防衛しようとしたのに、逃げてしまった。あれも自己保存。韓復榘は蒋介石を追い落とそうとした。蒋介石は韓が公的には戦わずに撤退したということ銃殺したということになっているが、両者の個人的対立があった。そこに戴笠の軍統の意志がかかわっていたかどうかは分からない。

**柴田**：南京を占領したときに日本軍は多くの捕虜を殺した。一方で同時期に山東省では、捕虜を帰順させて傀儡軍として受け入れた。そう考えると、南京大虐殺は日本軍の行動としては例外中の例外なのかと思う。戦後の歴史学ではあれが日本軍の本質ということになっているが、傀儡軍のことを考えると案外帰順を受けているし、そのギャップをどう考えればよいのか。

**馬場**：南京大虐殺は37年の12月だ。38年10月の表を見てもらうと分かるが、傀儡軍の一つ一つの帰順させている数が大変少ない。南京とほぼ同じ時期の山東の例で言えば、このレベルしかないということだ。日本軍は圧倒的に兵力が不足していたから、何らかの形で中国側の協力が必要になっていく。そういう意味で傀儡軍が必要とされていた。長期戦になればなるほど。それと南京とは質が違う問題だと思う。あんなにたくさん捕虜にしたら、食料が供与できないとか言われてもいる。

**柴田**：とは言っても南京の捕虜虐殺が浮いて見える。なぜ帰順を受け入れなかったのか、異様な事件だと思う。

**馬場**：山東と比較すれば特殊だとは思いますが。

**丸田**：抗日戦争末期の共産党側に寝返る傀儡軍。共産党側のデータからその数が詳しく分かるのかどうかという点が気になる。それから私は冀魯豫地区の軍事動員について勉強しているのだが、山東動員で徴兵した数についてはかなり詳しくでるが、軍隊内部の新聞を見ても、国民党軍が寝返ったというニュースは記事になって出てくるが、統計としてははっきり分からない。それがどういった史料からはっきり出てくるのか。八路軍もほいほいと受けいれているところを見ると、確固とした信念もない人たちが、状況に応じて有利な方になびいていく構造があると考えた方がいいかと思っている。生きるためのという以外の選択肢、事情はなかったのか。結局皆が生きるために、というだけだったのか。

**馬場**：自己保存というのが大きな要因だとは思いますが。44、45年になると圧倒的に八路軍が有利になってくる。どういう政治工作をやったのかということについては、共産党のドキュメントを20年代からあつめた『山東革命歴史档案資料選編』のなかにある。レジュメにもあるように人数自体は分かるが、莫正民の部隊は3500人、張希賢の部隊は1500人、部分的数はでてくる。抗日戦争末期になると日本軍に協力しても先が見えないという認識がかなり共通化されていた。そこへ共産党が政治工作をかけた。

**丸田**：寝返った部隊の長の人たちは、そういった政治工作を受けて、抗日、愛国に目覚めたという形になるのか、或いはどこかに飛ばされて殺されたとか……。

**馬場**：そこまで調べていないが、組織系統は解体された。内戦になったときにどういったふうに再編されていたかということは詳しく調べていない。ただ、独立旅団なので、編成のなかの横に置かれた扱い。それでどうにでも改編できる扱いだった。

**森**：逆に八路軍による国民党軍の切り崩し工作もあったはず。そういうことを専門的に研究していくと内容的に更に豊かになる。

**馬場**：八路軍による国民党の解体には、9.22事件という有名な事件がある。古訓国民党の第

57 軍の軍長繆激流が追放され、この部隊が独立してしまう。この事件に共産党が絡んでいる。この部隊が後に八路軍に参加しており、私が知っているのはこの一例だけだ。

**森** : 国民党の反共政策だとか、反共頑固派だとかいった記述が何箇所かあるが、これは見方を変えると、こういう言葉自体が、共産党の国民党軍に対する切り崩し工作を証明しているとも見える。

**馬場** : 仰るとおり。台湾の先生によれば、反共頑固派なんて共産党のつくった言葉だと。

**森** : だからこの辺の用語を・・・

**馬場** : つくったほうが良いのかもしれない。

**森** : そろそろ時間となりましたので、終わりにしたいと思います。

#### 【次回の予定】

日時 : 11 月 5 日

報告者 : 未定